

武田晴人さん

三井文庫新文庫長

はるひと

江戸屈指の豪商であった三井家。その貴重な史料が、中野区上高田の三井文庫本館に所蔵されている。明治36年（1903）、三井家の修史事業を目的に日本橋駿河町（現在の日本橋室町）に設立され、大正7年（1918）に拠点を変え三井文庫と改称された。戦災によって一部の史料が焼失しただけでなく、終戦後三井本社解散により三井文庫も活動停止を余儀なくされ、史料は文部省に寄託されたが、昭和40年に史料返還が叶い財団法人として再建された。今では三井文庫は、中野本館では社会経済史史料の保存・研究を、三井記念美術館では美術品の保存・公開・調査研究をそれぞれ担っている。

再開から55年の時を経て、今年三井文庫の新文庫長に就任した武田晴人さんは、日本経済史のスペシャリストである。昭和24年に東京都で生まれ、東京大学文科一類に現役合格し法学部進学コースで学びはじめるも、東大紛争の最中だった。「その混乱の中ではだれも法律なんて守らない。やってもしょうがないと思っただけです」。その末、経済学部を選択。ちょうどその頃、高度経済成長期の日本では公害問題が深刻化し、研究テーマとして公害史・公害運動史が流行を迎えていた。が、選んだのはほとんど未開拓の加害者側の鉱山企業や鉱山業。「論文のテーマを決めなきゃいけないとなったときに、人がやっていないことをやろう」と。鉱山業の中でも足尾銅山鉱毒事件が代表する銅山を追った。「古河財閥、三菱、住友……三井は銅山はやっていなかったたので、研究対象じゃなかったんですけどね（笑）」。

鉱山史の研究がまとまるまでおよそ15年。それまでに、29歳で東京大学社会科学研究所助手、31歳で同大学経済学部助教授になっていく。「東大紛争で、大学に対する考え方は変わりました。それまで大学内には権威主義が蔓延していて、学生の研究内容にまで指導教官が介入するという状況。私は実際の当事者ではありませんでしたが、よく耳にしていたので、自分が指導する立場になったときに反面教師にしましたね。若い人たちは自由にやらせる。持ち味を引き出す手助けをするというのがこちらの仕事」。学生の興味を否定せず共に研究してきたことで、武田さんの

ひと物語

三一九

自発的な関心以上に視界は広がっていったのである。

学問の世界では、何か新しいことを特定の分野で成し遂げなければ業績として認められない。専門分野だけでなく、多角的な審査を突破する必要があるために、容易なことではない。「さまざまな知見も取り入れて、自分の考えに落とし込んで新しい歴史解釈ができなきゃいけない。歴史学は総合科学で、個々の分野でいろいろやっているものを、全部受け止めていくという力量が問われます」。平成3年に東京大学経済学部教授に就任し、同大学院の教授や学科長などを歴任。平成27年に名誉教授となった。これまでに数々の研究成果を発表し、さらには指導した学生の研究が受賞するなど、「業績」を残してきた武田さんだが、「学者」になつたな、と思ったことはいまだにないかな」とボツリ。「大学に職がもらえたときには嬉しかったし、これで食う心配はないなと思っただけで、学者として認められたという感覚ではないです」。

「理屈で割り切れないのが歴史の中の現実かなと思うんです。割り切れない世界を描くことで、もつと経済学はこういうことを考えなきゃいけないんじゃないか、と気がつくのが歴史のおもしろさです」と話す武田さん。今年6月、三井文庫の新文庫長の任に就いた。「今後も、文庫長である私が走り回るような事態にならないのが一番だと思います。少数精鋭のスタッフが揃っていますから大丈夫でしょう。文庫長としてというよりも、研究仲間として、新しい史料の整理など手伝っていただけたら」。

写真●遠藤拓哉 三井記念美術館にて

